巻頭言

会長退任に当たり

前日本癌病態治療研究会 会長
千葉大学 名誉教授　**磯野 可一**

癌病態治療研究会が発足して、早や今年で14年の歳月が流れました。昨年6月に本研究会の会長を退任し、私もやっとその重責から解放されました。しかし、その間理想とする会の方向性を十分展開することは、叶わなかったと回顧しておりますが、多くの会員の皆様方のご支援により多岐に亘り研究分野も広がり、多くの成果をあげ今日の発展に至ったことは、大いなる喜びであります。この間における本研究会のあゆみは、第14回研究会（17年6月、於札幌）の特別講演「癌病態治療研究会の歩みと展望」で報告しました。

本研究会の事業の1つであります研究会開催は、北は北海道から南は九州まで日本全国に亘り、本年6月で第15回を迎えることになりました（表1、2）。また、その機関紙としての英文誌 Annals of Cancer Research and Therapy と和文誌 W'Waves の発行が確立されたこと、更に、若手研究者の啓発のための奨励研究と、研究会として推奨する班研究が定着しました（表3）。

次に、国際活動として　World Federation of Surgical Oncology Societies (WFSOS)へのアプローチは、着実に進んでおります。このWFSOSへの参加は、本研究会が1999-2000年に班研究として取り上げた「日本における Oncologist の教育、訓練、評価に関する研究」をもとに、本研究会が日本代表として登録され、今日に至っております。この研究は専門医制度の林立を憂うものとして、一学会の専門医制度によるものではなく、純粋に若手医師のがん診療の質的向上を図ることが目的であり、できるだけ若い医師の経済的負担を少なくし、国家的立場からか、がん関連学会が合同でその教育に当たるためのものとして立案されたものです。今年から、Oncologist の専門医制設立の動きがでておりますが、学会のためのものであってはならず、純粋に若き医師のがん治療の質的向上を図るためのものとして、設立されることを望みます。

本研究会の将来展望としては、会長講演のときに述べたことではありますが、この紙面をお借りして再度述べてみたいと思います。

1．将来的には、本研究会が研究会としてこのまま存続するのか、学会へ移行するのかが問題となります。

(1) 研究会として存続するためにはこの研究会としての特徴を生かす必要があります。学会は個人単位ですが、研究会は施設単位であることを重視すべきであります。

この研究会として調査、研究を行い、がん病態に基づく研究のほかに新しい治療法を提案すべきと思います。そのためには、従来どおりの班研究のほか、共同研究等により、施設間の連携を深め多施設によりデータを作り、多施設間でtryし評価する必要があります。

更に、若い医師のための教育として、学識、技能のほか、実地診療上必要な事項―保険、法律上の問題などを研究会期間中に、特別sessionを設け開催することも考える必要があると思われます。

次に、臨床上の問題を取り上げて、基礎を含めて多方面からdiscussionし、新しい方向性を生み出すべきだと思います。

(2) 学会への移行の場合には、他の研究会又は学会との合併を考える必要があります。今後の問題であります。

2．奨励研究、班研究について。

奨励研究については、2、3年後にその成果について発表していただき、評価されるべきであります。

班研究は研究会が主題を決め、研究会としての方向性を出すためのものとすべきであります。指名制でも公募制でも良いと思います。

3．Oncologistの問題は、今後の成り行きをみながら独自の道を求めれば良いと思います。

以上、私の思いつくまま勝手なことを述べさせていただきましたが、本研究会が真に会員のためのものであり、初期の目的としている患者さんの為の新しいtailor - made therapyを求めて、広く社会に貢献することを願っております。新しい会長の下、会員の皆様の協力により本会が益々、発展することを切におねがいいたします。最後に、これまで私を支えてくださいました生越教授に深甚なる感謝の意を表します。

表1　日本癌病態治療研究会総会ならびに歴代当番世話人一覧

回数	当番世話人	開催日	開催地	会員総数	施設	個人	賛助	西暦
1	三富利夫（東海大）	平成4年4月	東京	317	264	14	39	1992
2	磯野可一（千葉大）	平成5年5月	千葉	335	274	19	42	1993
3	浜野恭一（東京女子医科大）	平成6年5月	東京	339	266	29	44	1994
4	曽和融生（大阪市立大）	平成7年4月	大阪	344	266	31	47	1995
5	馬場正三（浜松医科大）	平成8年5月	浜松	339	263	31	45	1996
6	長町幸雄（群馬大）	平成9年5月	前橋	328	252	32	44	1997
7	近藤元治（京都府立医科大）	平成10年3月	京都	315	240	30	45	1998
8	藤本重義（高知医科大）	平成11年5月	高知	291	223	29	39	1999
9	小川道雄（熊本大）	平成12年6月	熊本	270	209	28	33	2000
10	梶原哲郎（東京女子医科大第二病院）	平成13年6月	東京	258	202	27	29	2001
11	小　泰久（東京医科大）	平成14年6月	東京	248	192	28	28	2002
12	峠　哲哉（広島大）	平成15年7月	広島	236	185	25	26	2003
13	張ケ谷健一（千葉大）	平成16年6月	千葉	236	187	25	24	2004
14	新津洋司郎（札幌医科大）	平成17年6月	札幌	226	180	24	22	2005

表2　研究会総会の主題・シンポジューム

第1回	癌治療の基礎と臨床研究の接点
第2回	①癌の悪性度と病態／②興味ある症例
第3回	①癌病態と免疫・化学療法／②興味ある症例
第4回	①癌とサイトカイン／②興味ある症例
第5回	①癌転移の病態とそれに基づく治療／②興味ある症例
第6回	①癌の診断治療における分子生物学的アプローチ／②興味ある症例
第7回	癌の浸潤・転移の病態と治療／②興味ある症例
第8回	癌の免疫療法
第9回	①癌病態の分子生物学的解析（基礎研究、基礎から臨床へ）／②癌病態からみた化学療法
第10回	癌病態に基づく治療戦略：癌病態ー術前にどれだけわかるか
第11回	癌病態に基づく遺伝子治療：基礎および臨床
第12回	①癌病態からみた治療戦略：分子標的治療と治療個別化／②生存からみた胃癌治療：日米における新しい化学療法
第13回	癌病態の分子レベルの解析とテーラーメイド医療の実践先端治療の現状と展開 ①遺伝子治療、細胞治療、分子標的治療の現状と展開／②がんの免疫療法の現状と課題／③消化器領域癌における治療の進歩
第14回	Cancer Biology and Therapy ①肝胆膵領域がんの最新治療／②分子標的治療と Chemoprevention ／③癌免疫治療法の最前線

表3　班研究

年度	①	②	③
1992	HLA 班		QOL 班
1993	HLA 班	遺伝子班	QOL 班
1994	HLA 班	遺伝子班	QOL 班
1995	HLA 班	遺伝子班	QOL 班
1996	HLA 班	遺伝子班	メタアナリシス班
1997	HLA 班	分子標的化学療法班	メタアナリシス班
1998	HLA 班	分子標的化学療法班	メタアナリシス班
1999		分子標的化学療法班	日本における oncologist の教育、訓練、評価に関する研究
2000	日本人の胃癌の発生におけるヘリコバクターピロリ感染と HLA 拘束性に関する研究	日本人の癌の発生、治療応答に関わる遺伝学的要因に関する研究	日本における oncologist の教育、訓練、評価に関する研究
2001	日本人の胃癌の発生におけるヘリコバクターピロリ感染と HLA 拘束性に関する研究	日本人の癌の発生、治療応答に関わる遺伝学的要因に関する研究	
2002	HLA 遺伝子（phenotype；蛋白レベル）を指標とした癌治療班		
2003	HLA 遺伝子（phenotype；蛋白レベル）を指標とした癌治療班	ヒト型モノクローナル抗体 huA33 を用いた胃癌治療の臨床研究	
2004	HLA 遺伝子（phenotype；蛋白レベル）を指標とした癌治療班	ヒト型モノクローナル抗体 huA33 を用いた胃癌治療の臨床研究	
2005	HLA 遺伝子（phenotype；蛋白レベル）を指標とした癌治療班	日本における Surgical Oncologist のありかた委員会班	